

～あとがき～

《時間の旅人》

岩橋 光善

相双地域は、地震・津波被害だけでなく原子力災害によって、人や環境さらに経済的な分断が進み、容易に解消できないまま現在に至っている。

2011年7月2日スタートした「南相馬市復興市民会議」に、建築士会相馬支部代表として参加。「市民会議」に提案した「災害危険区域」の条例が成立し安堵した。

一方、建築士として南相馬市20km圏内の罹災調査を仲間たちと成し遂げ、また被災状況・復興の進捗を記した。

2012年から、長澤さん作成「被災地ファイル」の現場取材に、9年間、20回以上同行。これからも続く。

現在「東日本大震災・原子力災害伝承館」で、県登録語り部として活動を続けている。

振り返ると、私は時の流れに抗いながら、常に居場所を求めて彷徨っている「時の旅人」なのかも知れない。



2016.3.1 被災地案内 検問中

2018.12 道の駅 セデッテかしま展示会場

2020.10 伝承館で語り部として活動

《取材同行》

原 美幸

長澤さんとは、最初のファイル作成取材から、日程を調整しながら同行した。マスコミ等で伝える被災地は、「復興」と名の付くところばかり。除染仮置き場には、フレコンバックが連なっている。「帰還困難区域」は、当時のまま。大熊町・双葉町の国道6号線は、いまだにジャバラケートが続く。

2013年、建築士として富岡町、大熊町に入り除染調査をした。放射線量20から30 μ Sv/h。厳しい体制下での調査だ。その後2016年、罹災調査で小高区に入る。調査は家主が立ち会うので避難先から戻ってくる。調査中の私に、避難生活の話始める。とめどなく話は続く。うなずいて聞いている私までが、その辛さに同化する。

「複合災害」は、今も人々を苦しめている。



富岡町

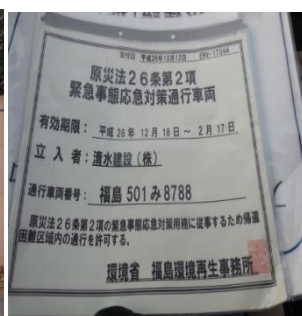


夜ノ森公園 さくら並木

2013・4・11「除染調査」で富岡町に入る。夜ノ森公園のさくらは満開。桜の樹皮の除染は表皮を剥がす。道路周辺も除染。立ち入り禁止によりジャバラゲートで封鎖。



大熊町



大熊町

2015.1.29

「事態応急対策通行車両」

と証明書

性能の良い計測計

アラームなり続ける

《環境カウンセラー仲間として》

倉田 智子(千葉県)

2012年4月、南相馬市原町区北萱浜一帯は、整然と分別された「がれき置き場」であった。震災後一年経過、送電線は取り払われた鉄塔がむなしく立つ。牛の飼料ロールが各所に転がり、湧き水に水草が葉を抜げていた。

2013年4月、40年ぶりという春の大雪に見舞われた。2014年5月、復興を掲げた看板の下、瓦礫は再生活用が進んでいた。この年以降、震災遺構として残す予定と聞いていた家屋は次々と片付けられ、除染廃棄物仮置き場は拡大していく。何度訪ねても地理的感覚が一致しない被災地。

そして今、復興の名のもとに、かつて存在した家々の跡はイノベーション・コーストと化していく。縁もゆかりもない人々が進める事業の数々。被災地の方々は津波に流され、その後は時代に流され続けている。

北は新地から南はいわきまでの浜街道を辿ることができたのは、岩橋・原・長澤さんのお陰である。感謝。



北萱浜がれき置き場 2012.4.15

2014.4.20 ほとんどが片付いた状態

2012.4.15 がれき置き場前

車両・木材・コンクリート塊・岩石などに分別 これらは選別して復興に使われた

水路、水が湧き出していた

《鎮魂巡礼》

長澤 利枝

岩橋氏と私は、2020年3月11日「震災9年鎮魂巡礼」取材と称して、約5時間被災地現場を回った。朝8時出発、取材ルートは、今なお存在する「帰還困難区域」。時は止まったまま、住民はいない。9年の歳月は住民の心を変える。避難先で新たな生活を築き、故郷に戻らない。一方で、長い避難生活によるストレス、疾病などで尊い命を落とす。福島県震災関連死 2,304人。今年 31人。更に孤独死が増え続く。

現場取材を終え、南相馬市北萱浜に予定通り到着。午後2時46分、犠牲者に哀悼の意を表す。

「2020・3・11震災から9年 鎮魂巡礼取材」ファイルは、5月完成予定だった。しかし、新型コロナウイルスで先延ばしになる。9月再取材後、ようやく取り掛かることができ、12月20日完成に至った。

「北萱浜郷土史」、南相馬市立博物館のご協力を頂く。岩橋さん、原さん、倉田さんのご協力に深く感謝を申し上げる。



2013.7.20 マルバシヤリンバイ

南相馬市の木 鹿島区 北海老



2018.4.14 タブノキ

鹿島区 右田



2018.5.20 ツバキとクルミ

小高区 浦尻貝塚